

Title	Louis Andre, Louis XIV et l'Europe (L'evolution de l'humanite, 3e section Le Monde moderne, 64)
Sub Title	
Author	平山, 榮一 (Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.25, No.3 (1952.) ,p.167(422)- 168(423)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19520000-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

Louis André, Louis XIV et l'Europe (L'évolution de l'humanité, 3^e section Le Monde moderne, 64). Paris, 1950.

こゝに有名な叢書の一部として提出された本書は、監修者アンリ・ベールの序文によると元來十七世紀史の専門家であるジョルジュ・バジェス氏に委嘱されて若干進行したのであつたが同氏の病歿により、新たにルイ・アンドレ氏が引受けて完成したものである。ルイ・アンドレは同様に十七世紀の専門家であり、既にエミール・ブルジョワとの共編によるルイ十四世時代に關する四卷の史料集やその他當時期の諸人物についての多數の研究を以て知られてゐる。

ともかく本書は表題の通りに一六六一年親政以後のルイ十四世の對外關係を主題として、王自身のメモアール、書翰、使臣への訓令や同時代の人々の記録などを廣汎に涉獵して、眞實を浮び上らせようと努めたものであることは明かである。著者がいふように『彼らの言ふことを常に信用する必要はない、しかし人々が信ずるであらうと彼らが期待したことを理解し、従つてたゞ批判するために公表された記録を使用することは有益と思はれる(四頁)』

といふ點に著者の態度がうかゞはれる。それ故に本書は單純な概説ではなくて、史料の適切な引用による生彩ある叙述を大きな特色としてゐる。

ルイ十四世の行動についての内面的、心理的觀察の多いことも以上の特色から明かに認められる。かうして從來無批判的に踏襲されてきたルイ十四世の政策に對しての空しい光榮を求めた軍事的侵略といふ評價に向つて、大いに修正を要求してゐる。結論にも『ルイ十四世ほど批難され、痛撃された君主はない』と述べ、事實の研究によつて偏見を是正すると主張してゐる。

本書はこれらの研究において觀察の視野が單にフランス國內の史實に限られず、廣く關係諸外國の實狀にまで及び公平な叙述を企圖してゐる。筆者はルイ十四世時代について、その侵略的行動のみを型の如く批難する從來の定説に嫌らず何らかの新しい見解を求めつゝあつたところ、本書を手にしてその新味ある立場に大いに心を惹かれた。ルイ十四世の行動をフランスの自然國境獲得を目的としたとの通説を否定し、自然國境の主張は大革命期にはじめて全面的にあらはれたものであると述べたり、またナントの勅令廢止は決してマントノン夫人に動かされたものではなく、王自身の信仰上の立場からであるとの説、また最後のイスパニア繼承戦役についてもルイ十四世の立場を可成り辯護的に述べるなど種々の新しい見地が事實の研究の裏附けを以て展開されてゐるの

を見ることが出来る。全體で三五〇頁あまり、詳細な引用書目と索引が附せられた本書に對して専門家でない筆者は充分な論評を加へる資格はなく、たゞ美事な史的研究所と綜合の手腕に打たれるばかりであるが、絶對主義最盛期のヨーロッパを理解する好著として推賞したい。

(平山 榮一)

考古學研究

東京大學文學部考古學研究室

第一冊 遼陽發見の漢代古墓(駒井和愛)

第二冊 曲阜魯城の遺蹟 (駒井和愛)

今次の大戦は洵に不幸な出來事ではあつたけれども、そのたゞ中に幾多の危険困難を冒して東亞の古代文化を闡明しようとする努力した我國考古學者の業績は認められて然るべきものと思ふ。その成果には見るべきものが多々存するけれども、大部分は今なお打ち續く出版事情の悪化に災されて未發表に終つてゐることは遺憾に堪えない。今幸い駒井和愛氏の勞作として表記二冊の報告書が刊行されたことは我々の深く感謝すべき出來事であり、些か世界の學界に對して肩身の廣くなる思いを感ずるのは筆者のみに限らぬであろう。駒井氏の發刊の辭によればこの報告書はなお續刊を予定されているらしいから一層優れた成果が示されることを大いに期待する次第である。

さて早速内容の紹介に移るが第一冊は昭和十六、十七、十九年に前後三回に亘つて實施された遼陽縣城南門外の石槨並に瓦棺及び城北、城西の石槨並に磚槨(第一回)、縣城南林子と玉皇廟に於ける壁畫を有する石槨二基(第二回)、城北北園の林産化學工業會社内に發見された壁畫を有する石槨(第三回)の調査報告であり、卷末に琿春縣半拉城發見の渤海國時代の佛像の研究が附されてゐる。

石槨墳六基は頁岩の切石を用い、整然と築かれ主室の外に數個の副室と廊下を有してゐる。特に第六號(林産化學工業會社内發見)には壁畫が明瞭に残存してゐた。

磚槨墳は特記すべき點に乏しいが、床面は網代に、側壁は横積と從積を混用する點が共通してゐる。また多數の瓦器を置く棚の設けがあつた點が注目される。五基が調査されてゐる。

瓦棺とされたものは水平に長大な甕を用いた一種の合口甕棺で、甕は長さ約八尺、口徑一尺二寸を計り、繩蓆文を施し、鎧戸文とも云うべき凹凸文を有するもので秦漢時代と推測される。漢代に於てかような合口甕棺の一種が駒井氏の推測したように廣く行われたとするならば、我彌生文化の甕棺の出自を考える上に、從來より一層大陸との關係を重視する必要を生じ、ひいては彌生文化の研究に新たな面を拓くものとも云うことが出來よう。

やゝ順序が亂れたが遼陽附近の古墳墓とその壁畫は從來も發見